

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成26年7月22日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 工学研究科・建築学専修

職名・学年 博士課程3年

氏名 サンティニ・サルザアノ・ティアナ

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第21回都市形態学国際セミナー 21 st International Seminar on Urban Form		
発表題目	図表史:日本の集落形に関するアメリカにおける初期の研究例		
開催場所	ポルトガル・ポルト県・ポルト市・ポルト大学工学部		
渡航期間	平成26年07月03日 ~ 平成 26年07月07日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(パンフレット)		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	交通費	210,000円
		宿泊費	40,000円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 私は、助成金支援に非常に感謝しております。この助成がなければ、今回の国際会議への出席は不可能でした。		

Results report on 第21回都市形態学国際セミナー (ISUF)
平成26年 7月 3日 ~ 平成26年 7月 7日
ポルトガル・ポルト県・ポルト市・ポルト大学工学部
サンティニ・サルザアノ・ティアナ

ISUF は、都市形態を研究する研究者や実務家のための世界最大の国際組織である。ISUF は、都市研究と都市形態学の分野で世界をリードする世界50カ国600名を超える研究者によって組織され、年1回世界各地でセミナーが開催されている。本年のセミナー21st International Seminar on Urban Form (ISUF2014、第21回都市形態学国際セミナー)は7月にポルトガルのポルト市で開催され、そのテーマは、「都市形態学と私たちの共通の未来」であった。ここでは、都市の物理的形態における環境の重要な役割が議論された。

参加国数・国名 数十カ国の予想 (加盟は日米英仏独伊葡豪中伯等50カ国以上)

参加者総数 100名以上 (会員数は個人・法人を合わせ約600)

主な参加者 (氏名・所属・国籍・専門)

Vítor Oliveira・ポルト大学・ポルトガル・都市形態学

Paulo Pinho・ポルト大学・ポルトガル・都市形態学

Jeremy Whitehand・バーミンガム大学・イギリス・都市形態学

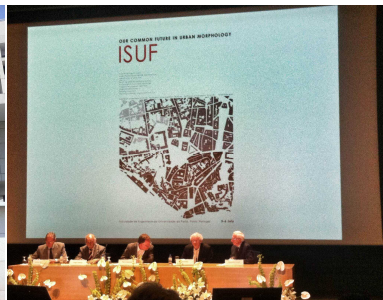
Giancarlo Cataldi・フィレンツェ大学・イタリア・都市形態学

Karl Kropf・Built Form Resource 社・イギリス・都市デザイン

(web site: <http://isuf2014.fe.up.pt/>)



会議開催地-FEUP



来賓スピーカー
パネルディスカッション



ドウロ川ポルト

Summary of the paper presentation:

題目-図表史：日本の集落形に関するアメリカにおける初期の研究例

集落に関する初期の研究は 20 世紀始めの数十年間にアメリカの地理学者によって行われた。この新しい研究分野においてどのような研究手法を取り入れることが必要かについては、当時熱く議論された。

アメリカ人地理学者のロバート・B・ホールは、1920 年代から 1930 年代にかけて、日本の農村部と都市部の集落について先駆的な研究を行った。これらの研究でホールは、図表ツールを利用して集落の形態と構造を分析する手法を用いたが、その際集落形成以前の形態学的段階や関連する政治的、歴史的出来事の情報までも含める方法を取った。しかし、ホールが集落形態と歴史を関連づける目的やどのようにそれを用いたかについては、これまで明らかにされてはこなかった。

本研究ではこのホールの研究について分析する。まず、集落研究において歴史データの包含を可能にした状況を検討する。そして、この歴史データが、どのように管理され、解釈されたかを、特に図表の使用に注目をしながら考察する。地理学者たちは、歴史データを収集するとともに、集落成長パターンの認識、原因の発見、あるいは集落の起源の探索のために史学を利用してきた。本研究発表でのこれらに関する議論を通じ、ホールの初期の研究における集落研究、歴史データ、図表表現相互間の関連性についてのより良い理解が与えられれば幸いです。

Results of the presentation:

都市形態学会議は、20 世紀初期に日本の集落について行われた、重要であるが見落とされている研究を発表するのに理想的な環境でした。

論文を発表したセッションは、興味を持って聞いてもらうことが出来、日本の集落研究に関する私達の発表後、複数の質問を得ました。ヨーロッパの大学の教授達は、ロバート・B・ホールの研究に興味を抱き、彼の日本に関する研究について複数の質問を受けました。ヨーロッパの研究がホールに与えた可能性のある影響について、数名の教授が干渉し、少し議論になりました。

発表と議論により、ホールの研究を国際的に聴衆へ紹介することが出来、また、ホールの研究におけるヨーロッパの影響の可能性についてのフィードバック、洞察を得られました。このフィードバックにより、ホールの研究の分析を新たな分野に広げる洞察、私達の研究の質を向上させる新しいデータを得られました。さらに、国際会議によるネットワーキングの機会が得られ、集落研究に取り組む、異なる分野の専門家との繋がりが生まれました。現時点で、日本の集落に興味を持つ外国人研究者との将来的な提携は交渉中です。

一般的な結論として、会議の結果は、研究の推進とこのプロジェクトの可能性の拡大という点で、非常に積極的で、建築的でした。

私および私の所属研究団体は、京都大学教育研究振興財団国際研究集会発表助成金および財団が私達に与えてくれた機会に非常に感謝しています。私達は、財団による学生支援、助成金により研究の質を向上させることを可能にする努力に感謝しています。